I－D1－1　糖代謝異常妊娠と正常妊娠における周産期事象の比較検討

三重大学産科婦人科
小塚　有紀，杉山　　隆，菊川　東洋，前田　洋一，
前川　有香，吉田　　純，日下　秀人，豊田　長康

【目的】我が国における大規模な糖代謝異常妊娠に関する妊娠・周産期事象を検討するために後方視的調査を行った．【方法】2001年の日本産科婦人科学会周産期登録システムを用いて，糖代謝異常妊娠771症例と正常妊娠6,926例において種々の周産期事象を比較検討した．【成績】48,177例の全症例中糖代謝異常妊娠は773例で1.6%であった．糖代謝異常妊娠群において，有意に母体が高年齢で，分娩回数が多く，分娩週数が短く，妊娠時の体重増加は少ないことが判明した．また出生体重，分娩時出血量，巨大児の頻度，帝王切開率，妊娠中毒症の発症率が高かった．巨大児の頻度は0.97%であり，その内糖代謝異常の頻度は14.0%であった．【結論】今回の検討結果より，糖代謝異常妊娠の種々の周産期合併症は正常群に比し，その発症率は高いことが明らかとなった．